

「深掘り中国史：宦官と纏足と辮髪」

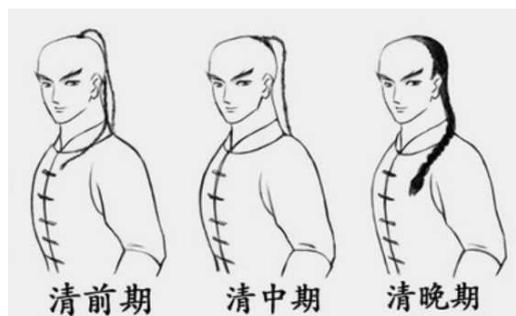
2月1日（土）、「宦官と纏足と辮髪」を開催しました。

このイベントは「宦官と纏足」として開催を予定していましたが台風と地震のために2度の延期を余儀なくされテーマに辮髪を加えてやっと開催されました。



宦官は、皇族のそば仕え宮城内での雑用でしたが、皇帝の世話役でしたが皇帝をたらし込んで自分の思うままに操り大きな権勢を持つものも出て来ました。後漢の滅亡にも宦官が大きな影響を与えました。唐王朝の最後の100年間、9人の皇帝の内、7人は宦官に擁立され、残りの2人は宦官に殺された。宦官の力は非常に強くなって財政・軍事権を握るようになり、皇帝の支配力は限定的なものでした。明の永楽帝の時代は宦官帝国と言われます。皇帝が決済すべき文書はすべて宦官が処理していました。

纏足は中国の旧習の一つ。女性の足を幼時から布で固く縛り成長させないもの、小さい足は美人の条件とされました。3～4歳から足の親指以外の4指を足底に折り曲げて布できつく縛り発育を妨げり、7～8歳で足裏を強く屈曲して脱臼させて小さいままとします。〈三寸金蓮〉の異名があるように、踵から爪先まで約10cmが理想とされていました。



交え編みした髪を辮髪といいます。男が頭を剃髪することは北方民族に一般的な風習でした。満州族は非常に抵抗したが、武力で強制され、清朝発足から百年後には漢民族にも定着し、男は辮髪が普通になり、清末まで続いた風習です。

参加者は、星川忠男、小林省三、大山茂樹、村橋陽三・美恵子の5名でした。

担当 文責：村橋陽三

※※ このイベントは、日本セカンドライフ協会と共同開催のイベントです。※※